

診断と治療（心的因果という病）：
美濃正「物理主義と心的因果」2008について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18473

診断と治療 (心的因果という病)

(美濃正「物理主義と心的因果」2008について)

応用哲学会第一回大会(於:京都大学)

2009年4月25日(土)

柴田正良(金沢大学)

青酸カリのもつ性質

(美濃 p.184の言い回しによれば)

- 青酸カリは、＜青酸カリである＞という性質をもつ。
- 青酸カリは現実世界@で毒である、つまり＜毒である＞という性質をもつ。
- 青酸カリは可能世界W1で人間身体に害を及ぼさない(つまり、毒でない)。
- しかし、青酸カリは、W1においても毒である。

内在的性質と関係的性質の混同

- しかし、美濃が言うように、青酸カリがW1においても<毒である>という性質をもつなら、青酸カリは、W1において(どころか、どの可能世界においても)<毒でない>という性質と<毒である>という性質を同時にもつ。



- しかし、どの可能世界においても、何かが相容れない性質を同時にもつことは、受け入れがたい。

(ここでは、「ある性質Fがある性質Gをもつ」→「Fをもつある個体aがGをもつ」のように表現する)

ある内在的性質は本質的であるが、 関係的性質は偶然的である

- 青酸カリは＜青酸カリ(KCN)である＞という内在的性質を本質的にもつ。 → あらゆる可能世界において、青酸カリは＜KCNである＞という性質をもつ。

↓ (しかし、関係的性質に関しては)

- 青酸カリは、@において＜毒である＞という関係的性質をもつが、W1において＜毒である＞という関係的性質をもたない。

内在的性質と傾向的性質

- 美濃が言いたかった(多分) → 青酸カリが、 $\langle @ \text{において} \langle \text{毒である} \rangle \text{という性質をもつ} \rangle$ という性質をもつことは、あらゆる可能世界において成り立つ。しかし、それは、以下に等しい。



青酸カリは、 $\langle \text{ある可能世界においてある傾向的性質をもつ} \rangle$ という性質、つまり、 $\langle \text{KCNである} \rangle$ という内在的性質をあらゆる可能世界においてもつ。

<ガラス状態(非晶質固体状態)> と<割れやすい>

- @において、あるガラスがたまたま割られるような状況になくとも、それは<割れやすい>という性質をもつ。
- しかし、ガラスより硬い物質が自然法則のゆえに存在しない可能世界W2においては、<ガラス状態である>という性質をもつ物体は、<割れやすい>という傾向的性質をそもそももたない。

美濃の誤り(1)

- (1) ある可能世界内部での傾向的性質の発現の「偶然的有無」と、可能世界ごとにおける傾向的性質の「法則的成立」が、美濃においては混同されている。
- (2) 内在的性質<KCNである>は、他のいかなる性質の存在とも無関係に、それとして存在し続けるが、それがどのような性質であるかは、関係的性質<毒である>などとして認識される。これが、見逃されている。

美濃の誤り(2)

- 「@において、＜割れやすい＞が発現していなくとも、あるガラスは＜割れやすい＞という傾向的性質をもつ」
ということから

- 「W2において、＜ガラス状態である＞という性質をもつ物体が＜割れやすい＞という性質をもつ」
は出てこない。

美濃の誤り(3)

- 「関係的性質としての傾向的性質の成立」(A)は、可能世界拘束的(world bound)であるにもかかわらず、「ある可能世界内部での傾向的性質の保持の有無」(B)がその発現の機会に拘束されない、という理由をもって、(A)が可能世界拘束的でない、つまりあらゆる可能世界において成り立つかのように推論したこと。
- 「本質的な内在的性質 ≠ 関係的性質」を見誤ったことに起因する。

キムの誤算(1)

- デイヴィッドソンに対するキムの批判は、AMでは「心的性質としての心的性質 mental properties qua mental properties」が因果的効力をもたなくなる、ということであった。
- したがって、キムが提供すべきは、心的性質がその因果的効力によって心的因果を構成する、という説明である。

キムの誤算(2)

- しかし、キムが機能的還元によって提供しえたものは、それぞれの場合における心的記述を満たす物理的性質の因果的効力によって、心的因果を構成するというものであった。
- しかし、心的記述は心的性質ではないし、記述は因果的効力をもたない。
- 心的因果は、結局、「物理的性質としての物理的性質」によって行われることになる。

キムの誤算(3)

キムは、デイヴィドソンに対する自分の批判から逃れられない

- 心的因果は、本当は心的性質としての心的性質によって可能となっているのではない
→ 心的性質そのものは、それ固有の因果的効力をもたないがゆえに、存在しない。
- 機能的性質は常に何らかの(1階の)物理的性質と同一となる → 关系的性質、2階の性質としての機能的性質は存在しない。

因果的効力から「可能世界群における規則的關係」へ

- はしかの感染
- 発赤・・・(規則的關係)
- 発熱・・・(規則的關係)
- はしかウィルスの除去によって発熱は除去できるが、発赤の除去によって発熱は除去できない。
- それは、問題とすべき可能世界群において、「発赤は生じるが発熱は生じないような可能世界がある」からである。

因果関係を暫定的に表現する

- 性質A(をもつ個体a)と性質B(をもつ個体b)の間に因果関係があるのは、基本的物理法則の共有などの何らかの範囲にあるあらゆる可能世界において、AとBの間にヒューム的な規則的關係がある場合であり、その場合に限られる。ただし、AとBは論理的含意関係にあってはならない。

因果関係を説明はしないが

- しかし、「ある可能世界群における規則的關係」は、因果的効力と同じくらいには、因果関係を表現する。
- 発赤と発熱が、例えば、基本的物理法則を共有するあらゆる可能世界で規則的關係にあるなら、われわれの直観に反し、両者の関係は真に因果関係なのである。